歴史アラカルト 10　　アメリカを見て回った平民宰相の決意

国民経済の飛躍的発展をめざした原敬

　原敬は安政 3 年(1856)岩手県盛岡に生まれた。祖父は南部盛岡藩の家老職を務めていました。明治 15 年(1882)外務省に採用され、天津領事に。モンテスキューやルソーを学んだフランス帰りの中江兆民に学ぶ。その 3 年後には外務書記官としてパリに駐在し文学はもちろん国際法を学ぶ。3 年後に帰国すると陸奥宗光の引き立てで、運命が開け日清戦争後に外務省次官となる。

衆議院議員に当選し政治の舞台へ

*陸奥宗光が病死する　→　明治 33 年(1899)立憲政友会に参加　→　明治 35 年(1902)初めて衆議院議員選挙で初当選(46 歳)し、政治の舞台に登場する　→　明治 41 年(1907)52 歳で世界一周の船旅へ(アメリカ・ヨーロッパ・ロシア)　→　このころ世界秩序をリードしていた欧州の衰退　→　アメリカで大学・企業を周りその工業力に圧倒される

***1917 年(大正 6 年)ロシア革命**　→　治安維持を名目に日本もシベリアへ出兵(革命軍に捕らわれたチェコ軍の救出を名目にして日米英仏のロシア革命に対する干渉戦争、日本は 7 万の兵力・4～9 億の巨大戦費)　→　軍は山形有朋の後押しを受けて戦線の拡大に動く　→　バイカル湖付近を抑える　→　ロシアの反革命勢力が大敗　→　陸軍大臣田中は派兵継続を主張する　→　米国との協調ができなくなる　→　シベリアで利用できる資源もなかった　→　全面撤兵か派兵か　→　日米の提携を主としてきた原は撤兵のため、米国に打診　→　が、米国は無断で撤兵する　→　原はこれを利用・山形有朋への圧力になる　→　政治主導の撤兵を計画する・そのために　→　大正 9 年山形有朋に「陸軍大臣田中」の処遇を相談する　→　寺原内閣総辞職　→　原内閣樹立

*明治憲法では、軍は天皇直属、政府の権限の及ばないもの「統帥権」　→　しかし、山形有朋これを受け入れる　→　選挙で選ばれた代表が軍を動かした

***1918 年(大正 7 年)第一次世界大戦終結**　→　パリ講和条約(米国のウイルソンは国際協調を訴える)　→　国際連盟を結成・日本は常任理事国に

*1918 年　シベリア派兵　→　米騒動･軍を投入するも非難集中　→　寺内内閣総辞職　→　大正 7 年(1918)原敬第 19 代内閣総理大臣に

1918 年初めてずくしの内閣総理大臣「原敬」

*それまでは明治政府を作った元勲と呼ばれる人たちが総理大臣に、その後は元勲の一部が元老として、この人をと天皇に推薦し、天皇が任命した。そのためすべて伯爵・侯爵であ

ったが、原は初めて平民でしかも幕府側の藩出身者としても初めてであった。
　加えて、選挙により選ばれた議員で政友会の党首だったので、政党内閣の定義にほぼ近いものだった。

＊原は矢継ぎ早に政策を実行するも……
　外国米を入れて価格の安定を図る　→　シベリアから軍の撤退を決定(シベリア出兵の大義名分はなく、国民にも兵にも理解不能だった)　→　日本の発展には軍事力ではなく、経済力の充実を図る　→　私立の学校に地位を与えるなど教育改革　→　地方経済発展のため大規模な鉄道敷設・官営八幡製鉄所　→　国民経済の飛躍的発展をめざす　→　経済は活況を取り戻した
*原の考えは-----*強兵ではなく、富国の道筋をつけた　*自由貿易のパートナーとして中国を見ていた　*軍と政府は天皇のもとに平等である
*原敬のような人が、もっと多くいるとよかった!!
*大正 10 年 1 月満鉄疑獄事件・その 2 週間後にアヘン事件と原の所属する政友会にまつわるスキャンダル　→　原内閣不信任は否決されるも　→　信任を取り戻すために全国遊説に　→　大正 10 年 11 月 4 日東京駅で右翼に刺され死亡 65 歳　→　原の死後政友会は分裂し力を失っていく　→　原の死から 10 年後の昭和 6 年(1931)満州事変勃発　→　その 2 年後国際連盟脱退　……　原がめざした協調路線とは逆の方向に日本は突き進んでいくことになる